

選評

選評

町田 康

今の世を生きている人間はこの世の大体の事がわからない。だが小説を書く場合、作者はその小説の世界で起こる大体の事がわかっている。なぜなら彼は作者であるからである。この事が、小説がおもしろい原因であるのだけれども同時に小説をつまらなくしている場合も少なくない。なぜかと言うと、小説は大体がこの世のことを参照しているので、元来、わからない筈のことをわかったように書くと、どうしてもその視座が限定的になり、下手をすると独善に陥るなどして読む者を白けさせるからである。宮沢恵理子氏の「振花」はわからないことをわからないままに書いているようなところがあり、どうなるかわからない人間の身の上と心持が其の俚に描かれていた。

秋田柴子氏の「雨を知るもの」は言葉遣いが正確なところに文章を綴ることについての誠実が現れた作品であった。最近、多く書かれる小説の特徴として被害の感情に基づくものが多いというのがあるように思うが、この作品では、それと表裏一体であるはずの加害の感情が描かれ、その心の動き、働きに説得力があった。

菱山愛氏の「三日月」は自尊心が挫かれ、自殺を図るなど社会生活に困難を覚える主人公が自然と言葉によって回復する物語である。「大丈夫」という簡単な言葉によって癒やされる心が不安定で均衡を欠く、また別の狂気である事がこの作品から窺われて興味深かった。

振れたままの魅力

堀江 敏幸

宮沢恵理子さんの「振花」は、題名のとおり物語がまっすぐに伸びていかず、可憐な花が要所で奇妙な振れを起こすところに、不思議な味わいがある。振れには支柱があつて、それが佐倉さんという霊能力のある女性だ。六十歳の彼女が、五歳上の夫とその友人を巻き込んで、恋以上の艶めかしい性愛をいくらかコミカルに匂い立たせる。まとまっているようでまとまらないもどかしさと、佐倉さんの言動に影響されながら自分の日常を変えていく瑞穂さんの実直さが好ましい。受賞に振れはなかった。

実直さの純度が高くなりすぎると、かえって濁りが生じる。菱山愛さんの「三日月」、医師としての日常を見つめる誠実な眼差しには、三日月の輪郭を補って満月にしなければ落ちつくことができないような不安が隠れている。ピンポイントで差し出された善意を全的に受け止め、欠けた部分を見つめない素直さと言ってもいい。それが作品の均衡をあやしく保つ力になっていた。

秋田柴子さんの「雨を知るもの」は、まだ乾ききっていない語り手の心の傷を、湿り気のある文章でうまく包み込む。雨の予知能力を持つ友人を追い出した狭い土地の偏見、噂と日和見。その毒がまだ本当の毒にならないうちに友人はみずから姿を消したのかもしれない。そんなふうを感じさせる寓話に似た味わいが、読後も消えずに残った。

思わぬ変化

青山 七恵

「振花」の主人公の目を通して語られるのは、おっとり者の六十歳、佐倉さん。天真爛漫な童女のように見えれば、死者の声を聴くスピリチュアルな面もあり、献身的に尽くす妻でもある。そんな佐倉さんが、突如成熟した色気を放つ何者かへと化す、終盤の艶やかな変化に、意表を突かれた。文章は独特なリズムで波打っていて、穏やかだけれど強引で、あれ、あれ、と思っているうちに、こちらもその波にのまれてしまう。佐倉さんがタンポポの綿毛になったり、その言葉から狸が出てきたり、干し草の匂いがしてきたりと、人間の輪郭の柔らかさを見せる描き方もよかった。

「三日月」の語り手は、とても謙虚な腰の低い人で、この、誰にへりくだっているのかわからない、読んでいて少し不安になるような語り方が、まず新鮮に感じられた。同時に、これは言葉についての話でもあると思った。医師の語り手は、患者が口にした言葉の切れ端から相手を理解しようと励む。あるいは、好きなもの嫌いなものを書き出すことによって、自身を見出していく。最後には、人と人が言葉で近づくその瞬間、近づいてもまだ残されるその距離が、やはり謙虚に大切に描かれていた。

「雨を知るもの」は、終始雨の気配が漂う語りの湿度が一貫していて、言葉が生み出す場の空気がしつかり感じられた。文章はスムーズで破綻がない。旧友からのお札なのか、あるいは仕返しなのか、自身の行いの報いを受けたとも読める結末も手堅かった。